

服飾から見た足利義満の冊封に関する小論

河 上 繁 樹

はじめに

中国が古来おこなってきた外交政策の冊封に関しては、これまでも議論されてきたところであるが、近年においては中国王朝を中心とする東アジアの国際秩序の原理性に着目した論文が発表され、この分野の研究はさらなる進展を見た。その秩序とは、中国国内における皇帝を頂点とした官位による官僚制的秩序、周辺諸国の夷狄をも包摂した爵位による身分的秩序、さらに周辺民族との間に兄弟や父子関係を結ぶ擬制的血縁関係による宗法秩序の三つの秩序であり、このうちの本来は朝貢体制と無縁であった宗法秩序が明代において朝貢体制に内在化し、朝貢国への冠服下賜として適応されたと指摘される⁽¹⁾。冊封においては、周辺諸国の君長（蕃王）が君臣の礼を尽くすため中国の皇帝に朝貢し、これに対して皇帝は蕃王へ回賜した。その頒賜品のなかには多くの冠服類や絹織物が含まれており、先の国際的秩序を可視化する標識として重要な役割を果たした。

筆者は冊封の問題に関して門外漢であるが、かつて豊臣秀吉が明皇帝神宗（万暦帝）から頒賜された冠服について論じたことがあり⁽²⁾、染織史の立場から冊封にともなう服飾類や染織品について関心を寄せるものである。注⁽²⁾の拙論では、京都妙法院に伝来する衣服類について、それらがいずれも『万暦大明会典』など明代の文献に見られる冠服

に一致するものであり、かつ文禄五年（一五九六）九月の豊臣秀吉の冊封にあたり、明皇帝が秀吉に宛てた勅諭の頒賜目録に記された冠服に相当することを指摘した。秀吉は麒麟の文様を付けた常服と五章皮弁服を頒賜され、郡王相当に処遇された。妙法院の冠服類は冊封の実際を知るうえで貴重な資料である。

しかし、明と豊臣秀吉との和議が決裂したため、秀吉の冊封は実現しなかった。秀吉に先立ち、実際に明皇帝から冊封を受けたのは室町幕府三代將軍足利義満（一三五八―一四〇八）であった。明との貿易を望んだ義満は、朝貢して冊封を受け、日明貿易が開始された。明の冊封体制のもとで「日本国王」となった義満についてはこれまでも論じられたきたが、冊封に欠くことのできない冠服の観点からの考察は十分におこなわれていないように思う。冊封をする側と受ける側ではそれぞれの思惑が違っているが、それを服飾という視点からながめてみるとどうなるのか。本論では、第一章において冊封を受ける側つまり義満の服装が冕服ではなく、法服に平袈裟という法体装束の最高礼装であったことに言及する。第二章では明側の視点に立ちながら冊封にともなう冠服に関して、朝鮮国王や琉球国王の例を参考にしつつ、義満へ与えられた冠服について検討を加え、九章冕服とともに麒麟の常服が賜与された可能性を論じ、これまで蕃王の序列として朝鮮国王と同等とされてきた義満の処遇がそれに及ぶものでなかったことを指摘したい。

一 応永九年九月五日、建文帝詔書拝受の儀の服装をめぐる

（一）届かなかった冕服

室町時代の日明貿易は、室町幕府將軍が明皇帝から「日本国王」として冊封を受け、明皇帝に対して朝貢し、回賜を受ける形式でおこなわれた。明との貿易を望んだ三代將軍足利義満は、將軍在職中の応安六年（一三七三）と康暦

二年（一二三八〇）の二度、明の太祖洪武帝に使者を遣わした。しかし、洪武帝は義満が私臣の身分で通交を求めたとして両度とも日本の国王とは認めず、明との通商は失敗に終わっている。

義満が日本国王として認められたのは、第二代皇帝建文帝の代である。義満は応永八年（一四〇一）に三度目の遣明使を派遣して、金千両とともに駿馬・薄様（和紙）・扇・屏風・甲冑・太刀などを献上し、さらに倭寇の捕虜となった人びとを明国へ帰した⁽³⁾。これに対して、建文帝は建文四年（一四〇二）二月六日付けで義満を「日本国王」と称した詔書を発給し、皇帝への恭順と倭寇の取り締まりを期待した。この時、義満は大統暦と錦綺二十四匹を賜った⁽⁴⁾。大統暦は明朝で用いられた暦であり、義満が明朝より大統暦を授かることは時空を支配する中華の天子の支配下に入ったことを意味する。もともと、それは明朝側の論理であり、詔書を受け取った義満の対応からは冊封体制に組み込まれた恭順な蕃王としての意識はほとんどなかったようである。

ここでは石田実洋・橋本雄両氏によって紹介された「宋朝僧捧返牒記」⁽⁵⁾および『満済准后日記』永享六年（一四三四）五月十二日条によりながら、応永九年（一四〇二）九月五日に北山殿でおこなわれた建文帝の詔書拝受の様子をうかがうことから始めよう。寢殿前庭の南側と東西には纈纈の帳を張りめぐらせ、明の使者を出迎える公卿十名と殿上人十二名は一日晴の染装束に身をつつんで中門の前に整列した。寢殿の室礼は母屋の南面に御簾を垂らして屏風を立て、さらに屏風の両脇には几帳を立て、あたかも着飾った女房が居並んでいるかのように几帳の裾から女房装束の袖をのぞかせた。これは打出と称し、晴れの儀式に欠かせない殿舎の装飾である。北山殿の寢殿は満済の述べるがごとく善を尽くし、美を尽くして荘厳された。屏風の前には義満の坐る曲杓が置かれ、その左右（東西）に明使の曲杓が一脚ずつ配され、正面には詔書を置く高机が立てられた。

いよいよ明使を迎え儀式が始まる。義満が昇殿して曲杓に着し、続いて明使が詔書を捧げ持つて昇殿し、高机に詔書を置く。明使の坐る向き・位置は正確にはわからないが、義満は寢殿中央の曲杓に南面して坐ったと考えられる。

そして、高机に置かれた詔書に対して、義満は法服・平袈裟の姿で焼香し、三拝（あるいは一拝）した後には跪いて詔書を拝見した。

明朝の公的な規定集成である『大明集礼』卷三十二「蕃国接詔儀注」⁽⁶⁾に照らせば、本来の受封儀礼においては、蕃王は冕服を着用し、誥命に対して五拝・四拝・三上香・四拝・四拝・両拝を行わなければならない。ところが、義満は冕服も着用せず、南面して明使から詔書や進物を受け取り、拝礼も不十分であった。そのうえ詔書を手に取って拝見した可能性もある。このことから橋本氏は「義満は、実際には明側の儀式規定をだいぶん逸脱し、遙かに尊大な態度で臨んでいたと見做すことができる。」⁽⁷⁾と評される。

義満が儀式規定から逸脱していたことは事実である。しかし、それがはたして「遙かに尊大な態度で臨んでいた」とまで言い切れるであろうか。『大明集礼』は、徐一夔らが編集した公的な規定集成であり、洪武三年（一三七〇）に完成した。その卷三十二「蕃国接詔儀注」は明皇帝の詔を蕃王が自国で拝受する際の儀式についての規定である。確かに応永九年九月五日に義満が受け取ったのは建文帝の詔書であるから、『大明集礼』の「蕃国接詔儀注」に則って儀式をおこなう必要がある。あるいは後世の『万暦大明会典』では「蕃王受封」の場合も同様の儀式を行うように記されている。

しかし、この度義満へもたらされた詔書は、明の皇帝が臣下の爵位の授与に用いる辞令書の「誥命」ではなかった。また「蕃国接詔儀注」には儀式に参列する衆官は朝服を、そして蕃王は冕服を着用すると記されているが、今回義満へ頒賜されたのは錦綺二十四匹に過ぎず、冕服や臣下の朝服が下賜された様子はない。後述するように、義満へ冕服が下賜されるのは永楽三年（一四〇五）十一月であり、実際に義満のもとに届いたのは応永十三年（一四〇六）六月のことであった。応永九年九月の時点では冕服は届いていない。建文帝は義満を「日本国王」と称したが、明側からすればこの段階ではまだ冊封は成立しておらず、冊封が決まっていなかった。たとえ

義満が望んだとしても（おそらくは望んでいなかったであろうが）、応永九年九月五日に北山殿で『大明集礼』の「蕃国接詔儀注」に則って冕服を着て詔書を拝受することはできなかったというのが実情ではないだろうか。

（2）足利義満の法服姿

義満としては、建文帝の詔書を受け取ったことによつて長らく望んでいた明との交易が始められるのであるから、この記念すべき儀式に臨むにあたっては室礼はもとより、服装についても善美を尽くすのが当然のように思える。義満は若いうちから法体装束を好んだといわれ、永徳三年（一三八三）九月二十日の絶海中津の鹿苑入院式には道服に袈裟を掛けた法体装束で臨んでいる⁽⁸⁾。応永二年（一三九五）六月二十日、義満は三十八歳で出家した。出家後、義満は法体装束にますますこだわりを見せるようになった。五条袈裟を掛ける時の緒の結び方や鈍色どんじきと呼ばれる装束の衣紋にまで自らの好みを取り入れた。とりわけ青蓮院ふうのスタイルが好みであったようで、袈代を着たときには、「指狩さしかり」という青蓮院門跡が使用したものと同じ袴を愛用していた⁽⁹⁾。そして、応永九年九月五日の儀式当日、義満は法服に平袈裟を着けた⁽¹⁰⁾。それは法体装束のなかでも最上級の正装であつたからである⁽¹¹⁾。

法体装束にも法服、袈代、鈍色などいくつかの種類があり、格付けがなされた。応永二十七年（一四二〇）成立の『海人藻芥』『僧俗装束相当之事』には、「法服ハ俗ノ束帯也、袈代ハ俗ノ直衣也、鈍色ハ俗ノ狩衣也、衣は俗ノ直垂也」⁽¹²⁾とあり、法服を天皇以下文武官が朝廷の儀式・公事に着用する最正装の束帯に相当させている。室町時代には装束の略式化が進み、束帯は節会などの行事でのみ着用される特別な装束となつたが、法体装束においても同様に鈍色が法体の正装として一般化され、法服は特別な法会等の限られた機会にしか着用されなくなつた⁽¹³⁾。その法服については、義満の出家に際して装束奉仕を務めた高倉永行が応永三年（一三九六）にまとめた『法体装束抄』⁽¹⁴⁾に詳しく述べられている。本書によれば、法服には赤色袍・裳、香袍・裳、黒袍・裳、薄墨布袍・裳の四種類がある。この



図2 足利義満像 土佐行広筆 足利義満持蔵（鹿苑寺蔵）



図1 足利義満像 飛鳥井雅親賛（鹿苑寺蔵）

うち最も格が高いのは赤色袍・裳であり、「法皇、竹園、貴人晴の時これを着給う」と記されている。義満は出家して間もない応永二年九月十六日の東大寺受戒では布の法服と平袈裟を着用し、翌年五月二十日の延暦寺講堂供養では香袍の法服に青地金欄の平袈裟と横被を着けた。この時の法服の文様は桐唐草、袈裟と横被は牡丹の文様であった。重要な儀式には常に法服と平袈裟で臨んでいる。そして、応永九年九月五日の詔書拝受の儀に際して義満は「赤色御法服。桐竹遠文。」を着用したと『法体装束抄』の裏書に追記されている。中院通方が著した『飾抄』⁴⁵⁾によれば、「赤色」は太上皇が着用する袍の色とされ、その文様は窠中竹桐であった。天皇の御袍につける桐竹鳳凰麒麟文は高貴な文様として知られるが、鳳凰や麒麟を除いた桐竹の文様も吉祥文であるとともに権威のシンボルであった⁴⁶⁾。義満の赤色の法服も上皇の赤色御袍に準じて作られたものである。室町時代の武家のあいだでは桐の文様に使用制限があったが、足利尊氏が後醍醐天皇より桐紋を拝領して以来、足利一門は桐文を使用した⁴⁷⁾。義満が法服に丸に頭合わせの三つ桐を使用したことは、飛鳥井雅親賛の「足利義満像」(図1)からもうかがえる。さらに義満の満中陰忌(四十九

日)のために描かれた土佐行広筆「足利義満像」(図2)の法服の文様は、桐に竹を組み合わせた丸文である。桐に竹を加えた文様は権力と吉祥性とを兼ね備えたものであり、晴れの場にふさわしい文様であった。なお、遠文は繁文とげもんに対する呼び方で、有職故実における慣例として若年が繁文を用い、歳を重ねるにつれて遠文にした。この時、四十歳の義満は遠文となる。

法服に掛ける袷袢は、平袷袢・衲袷袢・甲袷袢などがあつた。平袷袢は全体を共裂(一種類の織物)で仕立てた七条袷袢である。着用身分によつて香織物・白織物・白生平絹・薄墨布など色・材質を違えたが、錦や金襴などの高級な絹織物を用いることもあつた。平袷袢は法服のうえに着装する。着装法は、まず平袷袢の左上角に縫い付けられた輪を左手中指にかけ、袷袢を後ろへ引き回して、袷袢の緒を左肩から前へ取り、袷袢は右脇下から前へ回し、袷袢裏の緒を先ほど肩より前へ回した緒と胸前で結び、袷袢の端を折りたたんで緒に掛けた。

さらに法服のみに着用されるのが横被おひである。横被は細長い長方形の形状をなし、平袷袢の共裂で仕立てた。着装は背後から右肩に掛け、正面は袷袢のうえに垂らした。すでに述べた二幅の肖像画は、ともに僧綱襟を立てた赤色の法服に金襴の袷袢と横被を掛けた姿で描かれている。飛鳥井雅親賛の「足利義満像」からは左手中指に袷袢の輪をかけている様子など着装の詳細がうかがえる。また、土佐行広筆「足利義満像」は応永九年九月五日の建文帝詔書拝受の儀に臨んだ義満の姿を彷彿させる。それは義満にとつて礼儀をつくした最高の正装であつた。

確かに、橋本氏が指摘されるように儀式全体を見れば、明の儀式規定からは逸脱しており、日本流にアレンジしたところも認められる。しかし、義満にしてみれば、冕服は着なかつたのではなく、そもそも頒賜されていなかったのであり、その代わりに最高礼装の法服に平袷袢で儀式に臨んだ。明との交易が始まれば、義満は莫大な利益を手にすることができると。それは当然望むところであり、そのために「日本国王」として明皇帝の冊封を受ける必要があるが、敢えて非礼をはたらくこともない。冕服を授与されない段階で、日本流の最高礼装で明使を迎えることは義満な

りの礼儀であった。管見に過ぎないが、服装という視点から見れば、明の皇帝に対して意図して「遙かに尊大な態度」をとったとまでは言えないように思えるのである。もちろん、儀式における義満の行動全体を見れば、橋本氏が「それなりの儀式を執行したが、しかしそれは心底から中国の権威を認めて直受する類のものではなかったと評価すべきである。」⁽¹⁸⁾と述べられることには筆者も賛同したい。後述するように、その後義満は永楽帝より冠服や冕服を頒賜されるが、それらを儀式で着用した様子はうかがえない。明側からすれば、これまでも義満の態度が横柄に映るところがあった。応永八年（一四〇一）五月十三日付けで建文帝に宛てた書である⁽¹⁹⁾。「日本准三后某、書を大明皇帝陛下に上る。」ではじまるこの書は、朝貢国が宗主国へ奉る書式とは言えず、明の定めた国際ルールからは甚だしく逸脱していた⁽²⁰⁾。おそらくそうしたことが原因であろうが、次章で述べるように義満へはまず大統領、そして誥命・金印と冠服、さらに遅れて冕冠が段階的に授与された。そこには明側の思惑がはたraitしていたものと思われ、明はこの間に義満の態度を探っていたのではないかと想像するのであるが、門外漢の筆者がその大きな問題に立ち入ることはできない。

二 足利義満へ頒賜された「九章冕服」と「冠服」

（1）永楽帝より賜った冕服

応永十年（一四〇三）、義満は再び入貢するが、明では建文帝より帝位を篡奪して即位した永楽帝が義満の使者を迎えた。義満の上表を受けた永楽帝は、永楽元年（一四〇三）十一月十七日付けで義満に対して制書を発給した。その制書では、義満が永楽帝の即位後まもなく朝貢したことを褒嘉して印章が授けられた。この印章は亀鈕の金印であり、これとともに冠服と錦綺紗羅の絹織物が頒賜された⁽²¹⁾。続いて、永楽帝は永楽二年（一四〇四）十二月二日付け

の勅諭で、義満に倭寇の取り締まりを要請した²²⁾。これに対して、応永十二年（一四〇五）八月に明使の帰国に同行した遣明使源通賢らは、同十一月九日に南京へ入り表を奉呈するとともに逮捕した倭寇を差し出した。その後、応永十三年（一四〇六）に来日した明使潘賜らがもたらした永楽四年（一四〇六）正月十六日付けの永楽帝勅書では対馬や壱岐などに出没する海寇を義満が兵を出して取り締まり、その首領を捉えて明の朝廷に送ったことに感謝し、義満を「稟資淳慤、賦性聰明（生まれつき誠実で聡明）」と称え、「庸て印章を賜い、之に申ぬるに誥命を以てし、之に重ぬるに褒錫を以てす。」と記される²³⁾。印章はすでに永楽元年（一四〇三）に賜うたものを指すのであろうが、ここではじめて義満へ誥命が授与されたことが確認できる。この時点でようやく義満は永楽帝より正式に冊封されたことになる。ただし、義満宛の誥命は永楽四年（一四〇六）正月十六日付け勅書と同時に発給されたのではなく、二年前に金印とともに授与された可能性が高い²⁴⁾。

永楽四年正月十六日付けの永楽帝勅書に見える「褒錫」は、『明太祖実録』永楽四年正月己酉条に見られる「白金千両、織金及諸色綵幣二百匹、綺繡衣六十件、銀茶壺三、銀盆四及綺繡紗帳衾褥枕席、器皿諸物并海舟二艘」であるが、これらに冠服類が含まれていたかは明確でない。しかし、これに先立つ『明太祖実録』永楽三年十一月辛丑条に明使潘賜らを日本へ派遣する際に義満への賜品として「九章冕服、鈔五千錠、錢千五百緡、織金・文綺・紗・羅・絹三百七十八匹」が用意されたことがうかがえる。ここに記された九章冕服こそが『大明集礼』卷三十二の「蕃国接詔儀注」において蕃王が着用すべき装束として用意されたものである。

義満は、すでに永楽元年に「冠服」を下賜されている。この冠服と九章冕服は何が違うのであろうか。まずは冕服から見ていくことにする。冕服は、天地祖靈をまつる大祭に冕冠をかぶったことに由来する。冕とは冠上に載せる長方形の板を指し、板の前後に五色の珠玉を連ねた簾状の飾りを垂らした冠である。このような冠はすでに周代からあったが、後漢に制度化され、衰衣と合わせて衰冕と称し、以後の王朝へ受け継がれた。『万曆大明会典』卷六十、礼

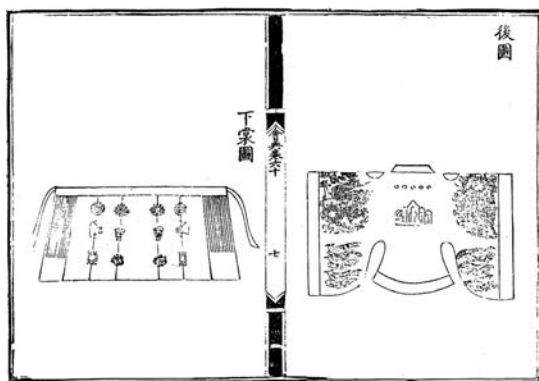


図4 衰衣〈背面〉と裳（『万暦大明会典』）

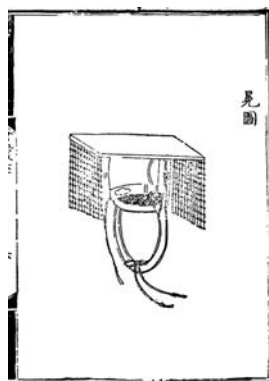


図3 冕冠（『万暦大明会典』）



図5 冕服姿の万暦帝

部十八、冠服一、皇帝冕服によれば、衰冕は皇帝が天地と宗廟を祭るときと正旦・冬至・万寿聖節に着用した祭服であり、永楽三年（一四〇五）定では、冕冠・玉圭・衰衣・裳・中単・蔽膝・玉佩・大帶・大綬・襪・舄から成る。皇帝の冕冠は冕と呼ばれる長方形の板の前後に十二の旒を垂らし、それぞれの旒には五采の玉を飾った（図3）。衰服は、黒い玄衣と赤い纁裳から成り、十二章を織り出した（図4）。十二章のうち、玄衣に日・月・龍・星辰・山・火・華虫・宗彝の八章、纁裳に藻・粉米・黼・黻の四章を付けた。

冕服は、明代以前は皇帝以外に官僚も着用したが、明代には宗室専用

表1 冕服の章数と配置

	章数	袞衣章	裳章
皇帝	十二	玄衣（日・月・龍・星辰・山・火・華虫・宗彝）	纁裳（藻・粉米・黼・黻）
皇太子	九	玄衣（龍・山・火・華虫・宗彝）	纁裳（藻・粉米・黼・黻）
親王	九	青衣（龍・山・火・華虫・宗彝）	纁裳（藻・粉米・黼・黻）
親王世子	七	青衣（火・華虫・宗彝）	纁裳（藻・粉米・黼・黻）
郡王	五	青衣（粉米・藻・宗彝）	纁裳（黼・黻）

の祭服となった（図5）。皇帝の他に皇太子、親王、親王世子、郡王の着用が許されたが、冕冠の旒数と袞衣・裳の章数は親等に応じて十二から順次九、七、五と通減した（表1）。

ところで、明代初期には蕃王の序列が爵制的秩序では親王の同列下位、官僚制的秩序では正一品に相当していたが、洪武二十七年（一三九四）の改定によって、蕃王は爵制的秩序において公・侯・伯の下位に置かれ、さらに従一品の郡王ランクに位置づけられつつも、官僚制的秩序では二品官相当として規定するようになった²⁰。しかし、朝鮮国王と日本国王だけは例外的に親王ランクとして厚遇された。義満に下賜された九章冕服と同様の冕服を下賜されたのは朝鮮国王だけであった。表1からもわかるように九章冕服は皇太子と親王の所用であるが、皇太子の袞衣が黒色であるのに対し、親王の袞衣は青色であった。以下に述べる朝鮮国王の例から、義満の九章冕服は青色であったと考えられる。

洪武二十五年（一三九二）に高麗を倒した李成桂が李氏朝鮮を興して冊封を要望したが、明朝は李成桂を国王と容認せず、冊封はなされなかった。李成桂を継いだ第二王朝朝鮮国王定宗は、建文二年（一四〇〇）九月に印誥を請い、それに応じて建文帝は翌年に冊封使を派遣した。ところが、この間に朝鮮国王は定宗から三代目の太宗に交替したため、誥命と印章の授与は止め置かれ、大統領だけが与えられた。改めて太宗より請封を受けた明は、建文三年（一四〇二）六月になって誥命と金印をもたらし、冊封が成立した²⁰。

この時、太宗は紗帽団領で冊封使を迎えた²⁷⁾。紗帽団領は、明の服制では常服にあたる。その後、太宗はしばしば冕服を要請し、建文四年（一四〇二）に明使が勅書をもたらしした。その勅書には、朝鮮は古来郡王に位置づけられ、五章あるいは七章服が賜与されたが、中国に対して厚く礼義を尽くしたゆえに「親王九章之服」を賜うとあり、朝鮮国王が明の親王相当に処遇されたことがわかる²⁸⁾。ようやく永楽元年（一四〇三）十月になって冕服が太宗のもとに届いた²⁹⁾。朝鮮ではこれ以来、第十六代仁祖に至るまで襲封のごとに明から冕服が与えられた。朝鮮の冕服については、すでに詳述されている³⁰⁾。永楽元年（一四〇三）に頒賜された冕服は以下のものであった。冕冠は前後に垂らした九旒に紅・白・蒼・黄・黒の玉を貫き、袞服には九章があらわされた。袞衣は深青色の絹地紗³¹⁾に龍・山・火・華虫・宗彝の五章を織り出し、纁裳には藻・粉米・黼・黻の四章を織りあらわした（図6）。袞衣のなかに着用する中単は白地紗で襟や袖口、裾に青色の縁取りをめぐらし、襟には黻を織りあらわした。この他に蔽膝・錦綬・佩帶・大帶・舄などを含めて一揃いとなる。

九章袞衣圖



九章纁裳圖

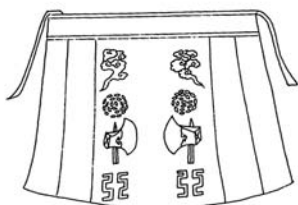


図6 九章冕服〈袞衣と裳〉（『三才図会』）裳にあらわされた一番上の章は雲のように見える。しかし、九章に雲は含まれず、本来これは藻でなければならない。

いっぽう、義満にも同様の九章冕服が賜与されたと考えられるが、それ以前の永楽元年（一四〇三）にすでに亀鈕の金印とともに冠服を賜っている。義満へ授与された金印は、明の親王ランクに相当する。蕃王に下賜された印章は、明朝の宗室の金宝に相当するもので、印章によって王爵のランクが示された。すなわち、親王ランクの蕃王には金印、郡王ランクには鍍金銀印が授与された³²⁾。ここで檀上氏が示された三つの秩序を確認しておきたい。それは中国国内における皇帝を頂点

とした官位による官僚制的秩序、周辺諸国の夷狄をも包摂した爵位による身分的秩序、さらに周辺民族との間に兄弟や父子関係を結ぶ擬制的血縁関係による宗法秩序である。この三つの秩序を可視化する標識として、印章が身分的秩序をあらわし、明代になって宗室専用とされた冕服および皮弁冠服が擬制的血縁関係による宗法秩序を示すことになる。では、官位による官僚制的秩序は何によって可視化されたのであろうか。それは常服によってであった。

(2) 冠服のなかの常服

義満が永楽元年（一四〇三）に頒賜された冠服はどのようなものであったのであろうか。『万曆大明会典』卷六十、礼部十八では「冠服一」の分類のなかに「皇帝冕服」が含まれ、あるいは同礼部十九では「文武官冠服」のなかに朝服・祭服・公服・常服が分類されおり、冠服という語は広義に用いられている。蕃王へ頒賜される冠服も、単に「冠服」と記される場合があり⁸³、冠服がどのような種類の衣服であったのかは一概に特定できない。ここでは義満へ与えられた冠服に限定し、その具体的な種類を探ってみたい。

これには琉球国王へ頒賜された冠服が参考になる。中山王の武寧が永楽二年（一四〇四）に冊封を受けた際は二品官相当に序され、皮弁服・玉圭・麟袍・犀帯が頒賜された⁸⁴。この時は冕服ではなく皮弁服が賜与されている。皮弁服は冕服に次ぐ礼服であり、中国の皇帝は朔望・見朝・降詔・降香進表・四夷朝貢朝覲のときに着用した。皇太子・親王・親王世子・郡王および蕃王もこれを着用することができ、その場合は冕冠と同様に親等・身分に応じて皮弁冠の縫数が逡減した。蕃王には正月元旦、冬至、万寿聖節に明皇帝の住まう居城に向かって遙拝する時に冕服の着用が求められたが、琉球国王に頒賜された最高の礼服は皮弁服であったため、これを着用して遙拝した。武寧をはじめ、第一尚氏王統第七代尚徳（頒賜は一四六三年）、第二尚氏王統の第一代尚円（同一四七二年）（図7）、第三代尚真（同一四七九年）、第四代尚清（同一五三四年）、第五代尚元（同一五六一一年）、第六代尚永（同一五七九年）、第七代

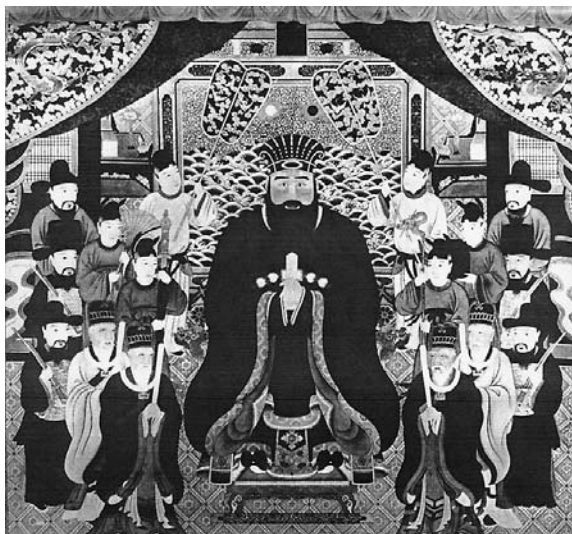


図7 皮弁冠服姿の琉球国王尚岡（御後絵）

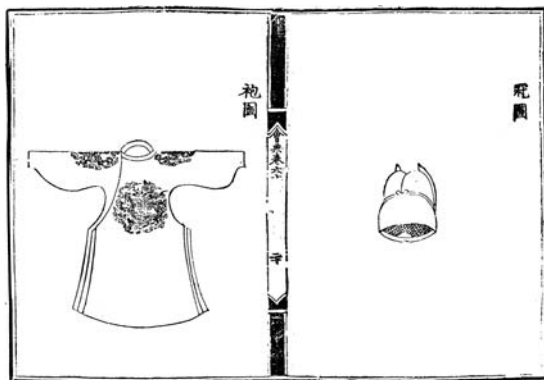


図8 翼善冠と蟠龍を織り出した袍(『万暦大明会典』)

尚寧（同一六〇六年）が郡王相当の七旒皮弁冠と五章皮弁服を頒賜された³⁵⁾。琉球国王に与えられた皮弁服は「大紅素皮弁服」とあるように紅染めの無地の服であり、冕服のように章は織り出されなかった。しかし、皮弁服一式を呼ぶ場合は「五章絹地紗皮弁服一套」のように章数を付けて呼んでいる。これは琉球国王に冕服が頒賜されなかったため、郡王相当の服であることを明記する必要があったからであろうと考えられている³⁶⁾。

尚徳以下の琉球国王には同時に常服も与えられた³⁷⁾。常服は皇帝以下の宗室が着用するとともに、文武官も平常の公務に着用した。ただ、琉球国王に与えられた常服は、郡王相当のものではなかった。明の郡王の常服は、冠が烏紗



図10 盤領衣 この図は豊臣秀吉が万暦帝より頒賜された常服の円領（妙法院蔵）であるが、同様のものが琉球国王へも頒賜された。



図9 烏紗帽と盤領衣（『三才図会』）

折上巾の翼善冠、袍は団領衫と呼ばれ、赤色の盤領窄袖でその胸と背および両肩に織金の蟠龍が織り出された（図8）。これに玉帯をしめ、皮の靴をはく。いっぽう、琉球国王へ頒賜された常服は、冠が烏紗帽（図9）、袍は「大紅織金胸背麒麟円領」であり、赤い盤領窄袖であるが、胸と背には織金の麒麟が織りだされていた（図10）。そして、帯は金廂犀帯であつた。金廂犀帯は、金の縁取りをほどこしたプレート状の犀角を飾った革帯で、『万暦大明会典』卷六十二の文武官冠服の常服の項にある「二品花犀帯」に相当する。これは『明史』卷六十七、輿服三に「永樂中、琉球中山王に皮弁・玉圭・麟袍・犀帯を賜い、二品の秩に視らう。」とあることと一致する。またここに記された「麟袍」は尚徳以下尚寧王までに頒賜された「大紅織金胸背麒麟円領」と同じものである。文武官の常服の花様（文様）は、公侯駙馬伯が麒麟と白澤と定められている（図11）。琉球国王の常服は、麒麟の花様を胸と背に織りだした赤袍を着用し、犀帯を帯びた。

これに対して、朝鮮国王に頒賜された常服はどうであつたか。李氏朝鮮第四代国王世宗の肖像画（図12）は、金基昶（一九一四～二〇〇二）によって描かれた近代の作であるが、常服姿で描かれており、着装のイメージが想起できる。正統九年（一四四四）三月に明より世宗へ冕服と常服が賜与された。その常服の品目は、翼善冠一頂、玉帯、袍服三襲、



図 12 常服姿の李氏朝鮮第四代国王世宗像 金基昶（1914-2001）筆



図 11 麒麟と白澤（『万曆大明会典』）

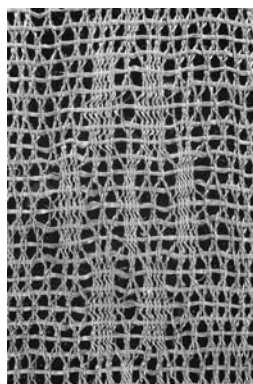


図 13 唐代の影響を受けた正倉院の羅

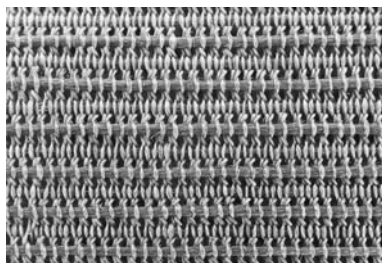


図 14 明代の羅（豊臣秀吉の常服〈妙法院蔵〉）

皂鹿皮靴一雙であつた。その三襲の袍服の内訳は

紵絲大紅織金袞龍暗花骨朵雲袍・青暗花裾襖・黒緑暗花貼裏
紗大紅織金袞龍暗花骨朵雲袍・青暗花裾襖・鸚哥緑暗花貼裏
羅大紅織金袞龍袍・青素裾襖・柳青貼裏

である⁸⁸。袍服三襲は、冬服・夏服・合服であり、それぞれ紵絲・紗・羅で仕立てた。紵絲は日本という絹子・緞子の類で冬服の料である。紗は生糸で織った目の粗い織物で夏服の料とした。羅も薄物の一種で、唐代の羅はレースのように透けた風合いであつたが（図13）、明代の羅は経糸が込んで目の詰まった織物となり（図14）、春



図16 裾襖（『三才図会』）
半臂は「搭護」または「背心」とも称された。



図15 緑貼裏（豊臣秀吉の常服〈妙法院蔵〉のうち）

表2 常服比較

品級	帯	袍	冠	
二品官相当	犀帯	大紅織金胸背麒麟円領	烏紗帽	琉球国王
一品官相当	玉帯	大紅織金袞龍袍	翼善冠	朝鮮国王

秋の料として用いられた。袍服一襲は袍・裾襖・貼裏で一揃えとなる。貼裏は袍の下に着用する丈の長いワンピース形式の服で腰から下に襷をとった形状をなし、襟は左右を掛け合わせて右衽にして右脇で結び留めた（図15）。裾襖は袖無しの半臂で（図16）、袍の上に羽織った。袍については、冬服の「紵絲大紅織金袞龍暗花骨朵雲袍」を例にとつて解説しておこう。生地は紅染めの糸で織り上げた真っ赤な緞子である。その緞子の全面に地紋として暗花の骨朵雲⁹⁹が織り出された。さらに胸と背、両肩には金糸を織り込んで袞龍をあらわした。琉球国王の常服と比較すれば、その相違は明確である（表2）。

朝鮮国王に頒賜された翼善冠、玉帯、袞龍袍は、明の親王の常服に相当する。朝鮮国王と同格に処遇された義満も、当然同様の常服であったと考えたところであるが、実際にはそうではなかったと思われる。永楽帝は義満を

冊封した後、永樂五年（一四〇七）五月二十六日付けの勅書を發給した。その別幅からは多くの頒賜品が義満のもとへ寄せられた様子が判明する⁽⁴⁰⁾。そのなかには錦十匹、紵絲五十匹、羅三十匹、紗二十匹、綵絹三百匹が含まれていた。「暗花骨朶雲」の紵絲や紗も見られる。しかし、義満はすでに冠服や冕服を受け取っていたので、今回の頒賜品のなかには身分秩序をあらわす標識となるような染織品は含まれていない。つまり、義満の頒賜品からは冠服の具体的な種類は判明しない。そこで、義満以後の足利將軍の例をうかがうことにする。

表3 宣德帝頒賜染織品のうち品級を示す常服料一覧

応永十五年（一四〇八）五月六日、義満はこの世を去った。永楽帝からは哀悼の意を表する祭文が届き⁽⁴⁾、さらに世子の足利義持に弔意を表した勅書と絹五百匹・麻布五百匹が届けられたが⁽⁴⁾、やがて国交は中断し、足利義教の代になってようやく再開した。宣徳八年（二四三三）六月十一日

紵 絲	羅	紗	日本国王（足利義教）	王妃
織金胸背麒麟紅一匹 織金胸背海馬青一匹 織金胸背白澤青一匹 織金胸背白澤綠一匹	織金胸背麒麟紅一匹 織金胸背獅子紅一匹 織金胸背虎豹紅一匹 織金胸背海馬藍一匹 織金胸背海馬綠一匹	織金胸背麒麟紅一匹 織金胸背獅子紅一匹 織金胸背白澤青一匹 織金胸背海馬綠一匹 織金胸背虎豹紅一匹	織金胸背麒麟紅一匹 織金胸背獅子紅一匹 織金胸背海馬青一匹 織金胸背白澤青一匹 織金胸背虎豹紅一匹	織金胸背犀牛紅一匹 織金胸背海馬青一匹 織金胸背犀牛紅一匹 織金胸背獅子青一匹 織金胸背虎豹紅一匹

希五百匹が届けられたが⁽⁴²⁾、やがて国交は中断し、足利義教の代になってようやく再開した。宣徳八年（一四三三）六月十一日付けの宣徳帝別幅には、義教に頒賜された絹織物が列記されている⁽⁴³⁾。錦は四匹、紵絲二十匹、羅二十匹、紗二十匹、彩絹二十匹である。また王妃にも錦二匹、紵絲十匹、羅八匹、紗八匹、彩絹十匹が頒賜された。このうち、紵絲、羅、紗はすでに述べたように冬服・夏服・合服として仕立てるための反物である。そして、その胸と背には麒麟をはじめ、白澤、獅子、虎豹、海馬などの獣が織金で織りあらわされていた（表3）。

これらの獣の文様は、『万暦大明会典』巻六十二の文武官冠服の常服の項に記される品級を示す花様である。すなわち、麒麟と白澤は公侯駙馬伯、獅子は武官の一品二品、虎豹は武官三品四品、犀牛は武官八品、海馬は武官九品となる。なぜ、国王

（足利義教）宛ての織物に三品四品の虎豹や九品の海馬など下位の花様が含まれているのか、また王妃に武官の花様を与えられたのか、不明な点があるが（同様の傾向は琉球国王の頒賜品にも見られる）、義教に琉球国王と同様の麒麟の常服となる料が与えられたことは確かである⁽⁴⁴⁾。さらに正統帝による正統元年（一四三六）二月四日付けの別幅からも、義教に麒麟・白澤の紵絲、麒麟・獅子の紗や羅が頒賜されたことがわかる⁽⁴⁵⁾。また、景泰五年（一四五四）正月九日付けの景泰帝より足利義政への別幅では、紵絲・紗・羅のなかに品級を示す花様を織り出した織物は見いだせないが⁽⁴⁶⁾、成化十四年（一四七八）二月初九日付けの成化帝より義政へ宛てた勅諭には頒賜品の紵絲・紗・羅に織金麒麟が含まれている⁽⁴⁷⁾。日本国王である足利將軍に対して、常服に仕立てるための麒麟の織物が給賜されたのは確実であり、常服に関しては豊臣秀吉に頒賜されたのと同様の「大紅織金胸背麒麟円領」が足利將軍にも授与されていたことになる。このことからすれば、義満が永楽元年（一四〇三）に頒賜された冠服は麒麟の常服であった可能性が高い。すなわち、亀鈕金印や九章冕服だけでは親王ランクとして朝鮮国王と同格の処遇のように判断されてしまうが、常服は朝鮮国王へ頒賜された袞龍袍よりも下位の麒麟服が義満に与えられたのであり、義満は朝鮮国王ほど厚遇されなかったことになる。

おわりに

義満の冊封を服飾という視点からながめてみた。応永十四年（一四〇七）十月、義満は京都に滞在していた明使を伴って高尾常在光院の紅葉見物に出かけた。その時、義満は明帝より贈られた唐人の装束を身にまとい、自らが乗った唐輿を明使たちに担がせたという⁽⁴⁸⁾。これを権力誇示とみるか、使節歓待の余興とみるかで義満への評価はおおいに違つてこよう。筆者にそれを判断する力はない。ただ、義満や明皇帝の思惑が服装に反映することは確かだと言え

る。義満は応永九年九月五日の建文帝詔書拝受の儀に法服に平袈裟で臨んだ。それは礼儀をつくした最高の正装であった。その後、明帝から賜った冠服についてはさほど関心を示した様子はない。明との朝貢貿易をするために日本国王となったが、自らの威信を増すために冕服を着て明の權威をかりることはなかった。このあたりは朝鮮国王や琉球国王の冠服へのこだわりとは大きな違いがある。『明神宗実録』によれば、「外夷」の襲封時には慣例として皮弁冠服と誥命・詔勅などが与えられたというが⁴⁹⁾、日本の場合、義満を除いて以後の足利將軍に冕服や皮弁冠服が与えられた形跡はない。朝鮮国王が第十六代仁祖の時まで王が代わるごとに明から冕服が与えられたのとは対照的である。朝鮮では明の服制に範をとり、冠服を要請しつづけた。あるいは琉球国王も襲封のたびに冠服の頒賜を望んだ。それに対して日本は明朝の服制を受け入れることはなかった。

いっぽう、明側の身分秩序を明示する標識として冠服は重要な役割を果たした。朝鮮国王が親王相当の九章冕服や袞龍の常服を賜与されたのに対して、義満は同じく親王相当の九章冕服を賜りながらも、常服は公侯駙馬伯相当の麒麟しか授かっていなかったと考えられる。麒麟の常服は郡王相当の琉球国王と同じである。義満は、五章皮弁服を頒賜された琉球国王よりは上位に位置づけられるが、義満以後の足利將軍たちは九章冕服はおろか五章皮弁服を下賜されることもなかった。さらに朝鮮出兵を引きおこした豊臣秀吉は、前例に従って義満と同じく金印を賜わりながらも、五章皮弁服と麒麟の常服を頒賜された。事実上の降格である。頒賜された冠服からは印章以上に明側の思惑がうかがえよう。

一九九九年に京都国立博物館で開催された特別展覧会『妙法院と三十三間堂』において、明皇帝神宗より秀吉に宛てた誥命（大阪市立博物館〈現在の大阪歴史博物館〉蔵）、勅諭（宮内庁書陵部蔵）とともに妙法院に伝来する皮弁服や常服が公開された。これをさかのぼる三年前の一九九六年二月に京都国立博物館は妙法院の宝物調査をおこなった。その折りに土蔵より運び出された唐櫃から赤や緑の色鮮やかな衣服が次々とあらわれた。これが秀吉の明服との

出合いであった。それを機会に拙論（注②）をまとめ、さらに展覧会図録に「爾を封じて日本国王と為す——明皇帝より豊臣秀吉へ頒賜された冠服——」と題する小論を寄せた。そのなかで冠服からみた秀吉の位について「秀吉の位置づけは一筋縄では解せない。」と書き、「秀吉の立場は、いささか微妙な気がする。」と述べて勉強不足をごまかした。その後、しばらくは明服の研究を放置していたが、最近、檀上氏の論文（注①および②）を拜読する機会を得て、一筋縄で解せないところが腑に落ちた。また、今回の拙論をまとめるにあたり、同氏の論文を参照させていただいた。学恩に感謝いたします。美術史の立場から染織の研究を志している筆者は、文献解釈が苦手である。秀吉の時はモノがあったが、義満はなにも残してくれなかった。秀吉の冠服を念頭に置きながら拙論をすすめて一応の結論を得た。大方のご叱正を賜れば幸いである。

注

- (1) 豊見山和行「琉球王国形成期の身分制について——冊封関係との関連を中心に——」（『年報中世史研究』第一二号 一九八七年）において、「明朝の冊封関係には、宗室の一員としての親王・郡王身分を可視的に表示する冠服を冊封時に頒賜していた。このことは、いわば擬制的父子・祖父孫関係の原理もその中に伏在していたことを意味する。」（一九〇二頁）と指摘されている。
- (2) 檀上寛「明朝の対外政策と東アジアの国際秩序」（史学研究会編『史林』第九二巻第四号 二〇〇九年 一〇三五頁）では東アジアの国際秩序の原理性に着目し、さらに踏み込んだ考察がなされた。
- (3) 河上繁樹「豊臣秀吉の日本国王冊封に関する冠服について」（京都国立博物館編『学叢』第二〇号）一九九八年 七五〜九六頁。
- (4) 田中健夫編『善隣国宝記 新訂統善隣国宝記』一九九五年 集英社 一〇八〜一〇九頁。
- (5) 注③前掲書 一〇八〜一一一頁。
- (6) 石田実洋・橋本雄「壬生家旧蔵本『宋朝僧捧返諜記』の基礎的考察」（『古文書研究』六九号 二〇一〇年）。
- (7) 橋本雄「中華幻想 唐物と外交の室町時代史」（勉誠出版 二〇一二年）一三〜三四頁。

- (6) 嘉靖九年（一五〇三）序 早稲田大学図書館所蔵朝鮮本（早稲田大学古典籍総合データベース、<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>）。
- (7) 原田禹雄訳注『明代琉球資料集成』 榕樹書林 二〇〇四年。
注(5)前掲橋本著書 三二頁。
- (8) 小川剛生『足利義満 公武に君臨した室町將軍』（中央公論新社 二〇一二年）一四三～一四五頁。
- (9) 松岡心平「足利義満の僧体のファッション」（『文学』第1巻・第6号 二〇〇〇年 十一月）岩波書店 一四五～一四八頁。
- (10) 『満濟准后日記』永享六年（一四三四）五月十二日条。「御法服（海老色）、御平袈裟（白地金襴）」とあり、満濟は法服を海老色といっているが、『法体装束抄』にあるように「赤色」がより正確な呼称である。
- (11) 注(8)前掲書には義満の法服姿について「法服に平袈裟も平常の装束であった事実は、冕服を着して四、五拝すべしという明の規定からは全く逸脱する。」（二二頁）と記述されている。平袈裟という言葉の印象から平常の装束と解されたのかもしれないが、本論で述べるように法服に平袈裟の組み合わせは最正装であり、平服ではない。
- (12) 『群書類従』第二十八輯 雑部所収。
近藤好和『法体装束抄』にみる法体装束（『立命館文学』六二四号 二〇一二年）。
- (13) 『群書類従』第八輯 装束部、および『大日本仏教全書』第五十巻威儀部二（鈴木学術財団 一九七二）所収。
- (14) 『群書類従』第八輯 装束部所収。
- (15) 桐竹文を織り出した衣服としては、益田宗兼が永正八年（一五一二）京都船岡山の合戦で功を立て、將軍足利義種より拝領した「白茶地桐竹文綾小袖」（重要文化財 東京国立博物館所蔵）がある。
- (16) 額田殿『菊と桐 高貴なる紋章の世界』 東京美術 一九九六年。
- (17) 注(5)前掲橋本著書 三三頁。
- (18) 注(3)前掲書 一〇八～一〇九頁。
- (19) 檀上寛「明代朝貢体制下の冊封の意味 ―日本国王源道義と琉球国中山王察度の場合―」（『史窓』第六八号 二〇一一年）一七三頁。
- (20) 『明太祖実録』 永樂元年（一四〇三）十月乙卯条。

注(3)前掲書 一一八～一一九頁。

(22) 注(3)前掲書 一二〇～一二二頁。

(24) 足利義満の冊封の経緯については、注(20)前掲論文に詳しい。檀上氏は、注(20)前掲論文において従来の研究では冊封国と朝貢国とが混同され、冊封の定義が不明であったことを指摘した。冊封成立の条件としては、辞令書としての誥命と身分標識としての印章が必要であった。その事例の一つとして足利義満の冊封問題をとり上げ、その成立時期について、これまで通説であった建文四年説に対して、「永楽二年に義満を日本国王に冊封して誥命と金印を賜ったのである。」(注(20)前掲論文一七〇頁)、「冊封は建文四年ではなく、永楽二年の冊封使の来日で正式に成立したことは間違いない。」(同一七四頁)とし、この根拠として『明太宗実録』永楽元年冬十月甲寅。例によって誥命については『明実録』に記載がないが、『万曆大明会典』巻一〇五、礼部六十三、主客清吏司、朝貢一、日本国には「永楽初、復来朝貢、賜龜鈕金印・誥命、封為日本国王」とあるように明確に述べられている。」(前掲論文注(28))とされる。また、田中健夫氏は『中世対外関係史』(東京大学出版一九七五年)において、明末に書かれた鄭瞬功の『日本一鑑』に「国朝永楽二年、冊封日本国王、賜龜鈕金印・誥命・冠服」と記されていることを指摘されている(一六七頁)。

(25) 注(1)前掲檀上論文 一一～一八頁。

(26) 注(20)前掲論文 一七一～一七二頁。

(27) 『朝鮮太宗実録』巻一 元年辛巳六月己巳。

(28) 『朝鮮太宗実録』巻三 二年壬午二月己卯。注1前掲豊見山論文 一五～一六頁。

(29) 『朝鮮太宗実録』巻六 三年癸未十月辛未。

(30) 柳喜卿・朴京子『韓国服飾文化史』源流社 一九八三年 一七六～一八七頁。

(31) 紗は、一般に経糸を二本ずつ絡ませて織り上げた縠組織の薄く透き通る絹織物(図a)をいうが、万曆帝より豊臣秀吉へ頒賜された絹地紗皮弁服の「絹地紗」は平組織の薄い絹(図b)であり、冕服の場合も同様の平絹であったと考えられる(注(2)前掲河上論文 八二頁)。なお、中国では図aのような最も単純な経糸二本が縠じれる組織は羅の一種と見なして「紗羅」と呼ぶ場合もある(趙豊『織綉珍品 TREASURES IN SILK』芸紗堂 一九九九年 三三五頁)。

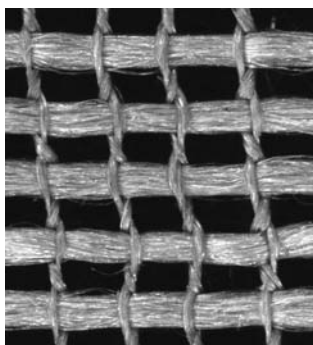


図 a 紗 組織拡大図

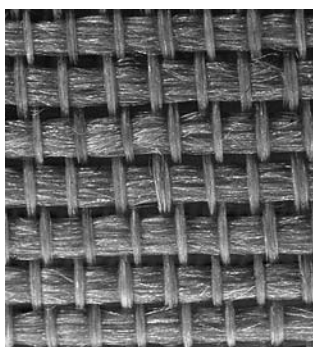


図 b 絹地紗 組織拡大図

(32) 注(20)前掲檀上論文 一六五～一六七頁。

(33) 注(1)檀上論文 明代朝貢国の印章・冠服一覧 一九頁。

(34) 『明史』 卷六十七 輿服三 外国君臣冠服。

(35) 原田禹雄「琉球国王の皮弁冠服」(『琉球を守護する神』所収 榕樹書林 二〇〇三年)。

(36) 注(35)前掲書 二二八頁。

(37) 沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案 訳注本』第一冊(第一集卷一～二十二)。

(38) 原田禹雄「琉球国王の常服」(注(35)前掲書所収)。

(39) 『朝鮮世宗実録』 卷百三 二十六年三月丙子(注(30)前掲書 一八九頁)。

暗花は経糸と緯糸に同色の糸を用いて組織の変化によって文様を織りだす技法であり、織り上がりは単色で地紋を織りだした織物になる。明代の緞子は、地を経五枚縐子組織とし、その裏組織の緯五枚縐子組織で地文をあらわしたものが多く見られる。緞子はあらかじめ染めた糸で織り上げるので、経糸と緯糸を異なる二色の糸で織ると、地には経糸の色があらわれ、文様には緯糸の色があらわれて、地と文様が明瞭に区別される。このような緞子を「閃緞」と呼ぶ。これに対して経糸も緯糸も同色で織り上げれば、地色と同じ色で文様が織り出される。この場合、光の当たり具合によって、地文が浮き出たり、「沈んで見えたりする。これが「暗花緞」である。

(42) (41) (40)

『大日本史料』第七編之九、応永十四年八月五日条。
注(3)前掲書 一三〇～一三二頁。
注(3)前掲書 一三二～一三三頁。



図 c 雲文緞舎利裾

「暗花骨朶雲」は、朝鮮国王のみならず、琉球国中山王尚真、足利義満や足利義教へ頒賜された緞匹にも散見し、頒賜品に多く含まれるものであった。このことからすれば、京都の妙法院に伝来する明代の官服は、豊臣秀吉が文禄五年（一五九六）九月の冊封時に頒賜された冠服の他に、同時に秀吉配下の武将たちに与えられたと考えられる官服が遺されており、その一部の服に見られる地文が骨朶雲ではないかと思われる。また、同様に上杉景勝へ賜与された常服一式が米沢市の上杉神社に伝えられており、表着の円領やその下に着た貼裏の生地が暗花骨朶雲の緞子に相当するものである。朝鮮での例は、黒石寺の阿弥陀如来像に納入された織物のなかに見られる（金英淑『朝鮮前期仏像納入織物の研究——黒石寺阿弥陀仏像納入織物を中心に——』彩流社 二〇〇七年）。像内に納められた願文等から太宗の代の元敬王后閔氏から成宗の代の明嬪金氏までの王室の人々が関係することが判明し、四十八点の織物類は十五世紀の朝鮮の織物の一面をうかがわせる。その一つ、雲文緞舎利裾（図c）に用いられた緞子の雲文は妙法院や上杉神社の緞子の雲文と類似しており、このような緞子が「暗花骨朶雲」であろうと考えられる。

- (43) 注(3)前掲書 二〇六～二一一頁。
(44) 常服が頒賜される場合、すでに常服の形状に仕立てられたものが頒賜される場合と反物で頒賜され、それを自前で仕立てる場合があった。琉球国王の例でいうと、天順五年（一四六一）に尚徳へ頒賜された常服として「大紅羅織金胸背麒麟円領一件」とあるのはすでに仕立てられた服であり、同時に頒賜された紵絲四匹のうち「織金胸背麒麟紅一匹」などあるのは反物である。この反物から常服を仕立てる方法は『万暦大明会典』卷六十一、礼部十九、冠服二、文武官冠服の常服の項目に次のように記されている。「官員の人の衣服の大きさは、その人の体の大きさに合わせる。文職の官は、衣の長は領より裔まで、地を離れること一寸。袖の長は手よりも長くし、袖を返すと肘に届く。袖付けは幅一尺、袖口は九寸。公侯駙馬は文職官に同じ。武職の官は、衣長は地を離れること五寸、袖長は、手よりも七寸長め。袖付けは幅一尺、袖口は拳がやっと出る程度。」（注37前掲原田著書）。

- (45) 注(3)前掲書 二二〇～二二五頁。

- (46) 注(3)前掲書 二二六～二三三頁。

- (47) 注(3)前掲書 二六八～二七七頁。

- (48) 『教言卿記』 応永十四年（一四〇七）十月二十日条。

- (49) 『明神宗実録』 万暦二十三年（一五九五）正月庚辰。

図版出典

- 図1 足利義満像 飛鳥井雅親賛〈鹿苑寺蔵〉「京都五山 禅の文化」展図録 一〇八番 日本経済新聞社 二〇〇七年

- 図2 足利義満像 土佐行広筆 足利義持賛〈鹿苑寺蔵〉「京都五山 禅の文化」展図録 一〇七番 日本経済新聞社 二〇〇七年

七年

- 図3 冕冠『万暦大明会典』

- 図4 袞衣（背面）と裳『万暦大明会典』

- 図5 冕服姿の万暦帝 <http://ja.wikipedia.org/wiki/ファイル:Wanli-Emperor.jpg>

- 図6 九章冕服〈袞衣と裳〉『三才図会』

- 図7 皮弁冠服姿の琉球国王尚円（御後絵） http://ja.wikipedia.org/wiki/ファイル:King_Sho_En.jpg

- 図 8 翼善冠と蟠龍を織り出した袍『万暦大明会典』
- 図 9 烏紗帽と盤領衣『三才図会』
- 図 10 常服 麒麟文円領〈妙法院蔵〉『学叢』第二十号 注(2)河上論文
- 図 11 麒麟と白澤『万暦大明会典』
- 図 12 常服姿の李氏朝鮮第四代国王世宗像 [http : //jp .ask .com/wiki/ 世宗](http://jp.ask.com/wiki/世宗) — (朝鮮王) [Sejong + of + Joseon .jpg](http://Sejong+of+Joseon.jpg)
- 図 13 唐代の影響を受けた正倉院の羅〈京都国立博物館蔵〉筆者撮影
- 図 14 明代の羅(豊臣秀吉の常服〈妙法院蔵〉)『学叢』第二十号 注(2)河上論文
- 図 15 貼裏〈妙法院蔵〉『学叢』第二十号 注(2)河上論文
- 図 16 裾襖『三才図会』
- 図 a 紗 組織拡大図 筆者撮影
- 図 b 絹地紗 組織拡大図 筆者撮影
- 図 c 雲文緞舍利襟『朝鮮前期仏像納入織物の研究 — 黒石寺阿弥陀仏像納入織物を中心に—』彩流社 二〇〇七年

——文学部教授——